

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

昨年夏、被爆国の首都東京で、核兵器廃絶の「アピール署名」は、ついに都民過半数を突破し、国の内外に大きな励ましを与えました。
この成果の上に、東京ではまた新たに二つの大きな運動を進展させてきました。
その一つは、原水爆禁止運動発祥の船「第五福竜丸」のエンジンを移送、再会させた運動です。紀伊半島沖に沈んでいた元第五福竜丸のエンジンを引き揚げた和歌山県の市民運動と都民の運動が連動し、大型重量のエンジンをついに東京まで移送し、第五福竜丸との再会を実現させました。
去る三月十九日には、福竜丸の保存展示に責任をもつ東京都の青島知事への贈呈式も終えました。今後は、エンジンの保存、展示の具体的な工事を実現させる運動となっています。
この運動には、被爆者団体、東京生協連、東京地婦連、東京原水協、労組など三十一団体が参加して、幅広い共

第五福竜丸のエンジン再会運動を 「東京原爆展」にも発展させよう

田川時彦

昨年夏、被爆国の首都東京で、核兵器廃絶の「アピール署名」は、ついに都民過半数を突破し、国の内外に大きな励ましを与えました。
この成果の上に、東京ではまた新たに二つの大きな運動を進展させてきました。
その一つは、原水爆禁止運動発祥の船「第五福竜丸」のエンジンを移送、再会させた運動です。紀伊半島沖に沈んでいた元第五福竜丸のエンジンを引き揚げた和歌山県の市民運動と都民の運動が連動し、大型重量のエンジンをついに東京まで移送し、第五福竜丸との再会を実現させました。

- ・日時 六月二〇日(土) 三〇日(火)の十日間
- ・会場 JR山手線・大崎駅前 但し二五日(木)は休館日
- ・主催 東京原爆展実行委員会
- ・後援 都民連合会、東京地婦連、東京原水協、東京生協連、東京地協連、東京原水協、労組
- ・内容 広島・長崎、原爆資料館の被爆資料、写真、被爆者の絵、日本被爆協作成「原爆と人間展」パネル。福竜丸被災資料

原爆展大運動は、福竜丸エンジン移送、再会の都民運動とも連動して、さらに広い共同の結集を見せています。被爆者、市民、婦人、学生、教育、労働、原水協、平和、宗教など、多様な団体の賛同がすでに五四団体(うち二八団体が実行団体)を数え、さらに増え続けています。
福竜丸のビキニ水爆被災事件は、広島、長崎の原爆被災に続いて三度も核兵器被害を受けた被爆国民の悲しみと怒りを燎原の炎のように広げました。「先生、お父ちゃんを助けてください。あのじっけんさんなかつたら、こんなことにならなかつたのに、こんなおそろしい水ばくは、もう使わないときめてください」(原爆と人間展パネル)
久保山愛吉さんの遺児で、当時小学校三年生の久保山みややさんが作文で訴えたこの内容は、思想、信条をこえ被爆国民全体の原水爆禁止の願いでもあったのです。運動も、政党、政派をこえて行政までも参加する幅の広さをもっていました。
いま一度この運動の原点に立って、核兵器廃絶の声が、都民すべての世論になることを被爆者として、つよく願わずにはおられません。
(東京被爆協・副会長)



永い年月を経てエンジンは展示館の船体と再会した

エンジン、船体と熱い「再会」——公開は今秋

三月十九日、第五福竜丸のエンジンは、夢の島で待つ船体と「再会」した。廃船とともに船体から切り離されて32年、第五福竜丸保存運動の市民的高揚の契機となった「沈めてよいか第五福竜丸」の投書から30周年の永い年月であった。一般公開はまだ今秋十一月からとなるが、第五福竜丸保存に力を尽くし、エンジンの行く末を見守り続け、語り伝え、一緒にお願い、引き揚げ、夢の島へと熱い思いを馳せた無数の人々の鮮烈な意思を



あいさつする青島都知事

全身に染み込ませたエンジンを、その風格にふさわしく展示・保存できるように、いま努力が進められている。
エンジンは去る二月二十日、和歌山市を出発、大阪、奈良、滋賀、岐阜、愛知の各地での熱烈的な歓迎、歓送、展示をへて二月二十八日焼津市に到着、ビキニデーの会場前に展示された。三月二日から神奈川県三浦市で展示のあと、十九日東京に到着した。
十九日午前、都庁第一庁舎止門前でエンジン贈呈式が行われた。「和歌山県民運動」代表から目録を受け取った青島幸男東京都知事



エンジンの台上で杉末廣氏(下)と握手する小塚博氏

は「第五福竜丸のそばにエンジンを展示し、これを見守り、核廃絶のメッセージを広げていくなかで、みなさまの熱意を私どもの熱意として世界中に発信していきたい。展示館を訪れた方々が、エンジンとともにある船体のみで、核廃絶にむけて、新たな希望を汲み出して下さることを念じます」と述べた。

展示館、七月一日から十月三十一日まで休館
四月、新年度の契約更改とともに展示館の修理工事が、準備期間をいれて四月一日から十月三十一日まで七ヶ月と決定。船体を含め全面的な修理工事となり、「七月一日から十月三十一日まで休館、新装開館は十一月一日」となった。



新しく完成した展示館の事務所・倉庫

午後三時過ぎから第五福竜丸展示館前で開かれた「お帰りなさい集会」には、「都民運動」の人々、広島・長崎の被爆者のみなさんとともに第五福竜丸乗組員の大石又七さん、小塚博さんも参加し、エンジンを引き揚げた杉末廣さんと固い握手をかわした。集会では、参加者が折り鶴や寄せ書きを輪につなぎ、第五福竜丸の船体とエンジンを結び再会を祝し、新たな運動への決意をともにした。
新事務所完成
第五福竜丸展示館の新しい事務所が三月二十七日完成した。倉庫兼用でわずかに50㎡、展示館西側出入口の横で「館外」、周辺整備やアプローチも未完成だが四月中に移動の予定。



『第五福竜丸』の資料展示パネルを前に新藤監督(右)

た映画が上映されるといふことを非常に光栄に思っています。こういうようなことは、なかなかないですね。私の経験では初めてなんです。作った現場で上映することはありませんけど、広島で『原爆の子』を作りました時は広島で映しましたが、これは船という限られたスペースなんです。そういうところは実際に映されるといふことは画期的なことですし、今後もうないんじゃないかと思えます。四十年前を思いおこしますが、私もその頃四五歳だったんですが、まだまだ元気にあふれている時でして、難問題にとっくむことが出

来たわけなんです。こういうシリアスなドラマは作っても、上映する場がないということだったんです。そういうことで、非常に苦労が伴いましたけど、この映画は苦勞を共にする同志がいまして、その人たちに助けられました。結果的には七十人出ているわけですが、ほとんど無報酬で参加して下さいます。完成することが出来たわけなんです。

船も映画も生き証人

最後の撮影を終わりました、二カ月間いました宿賃も未払いのまま帰ることになりました。焼津の人たちが金がある時に払えばいいんだとおっしゃって下さいます。私たちは東京に帰って仕上げること

やるといふやり方をとりました。ビキニ環礁で死の灰を被ったという場面が出てきますけど、太平洋まで行くわけにいきませんから、焼津港から毎日一時間半ほど沖に出ていきますと陸が見えなくなる。そこで撮影をしたんです。たいへん波が高いところで、われわれスタッフも海に慣れるまで酔い続けながらやるといふことで、ひと夏ほどいました。撮影が終わるところはみんなは酔いしれてすむようになつたんです。まあたいへんな苦労がありました。しかし、実際のことをそのまま撮るといふ、再現するわけですから、船が出ていって、帰ってくる、わが家に帰る、死の灰を浴びたことが発見される、焼津の市役所に知れる、焼津の病院に入るという順序になるんですけど、それは全部、焼津の市役所、焼津港、焼津の病院、民家の人たちが、そういう人たちに協力してもらわなければなりませんから、この方々が非常に協力してくださって、撮影を終

とが出来ました。それから、二年後に作り直した『裸の島』という映画がありました。これもドキュメンタリーみたいな作品なんです。これで大きな収益をあげ、焼津の旅館に払いに行つたんですけど、本当に金を払いにきたんです。というふうな言われたぐらいです。全く困難な撮影をやった押しきってやることができたんです。しかし、こういうふうな四十年程経ちまして、こういう形で見てもう出来ることになるといふのもですね。何か一つ仕事をしたいと思つて、行動に移すということが出来たというふうなことを、私も非常に喜んでるわけです。何かに寄与することが、出来たかなと思つています。焼津の町でとにかく、朝も昼も夜もほとんど二カ月程過ごしたんです。六月から七月にかけてでして、クーラーのない時代で、その暑さの中で仕事をしました。毎日毎日、船に乗って沖に出るんですけど、沖にでると本当に青い海で、資金不足も困難な撮影も苦勞も忘れて、青い海にずっと進んで行って、行けば行くほどすべてを忘れるという状況がありました。私たちはなつかしい思いを今も、焼津の海にもついているわけです。

この映画を、これからは私たちが大事にしまして、出来るかぎり長く、長くこの映画を保存していくというのを、やりたいと思つています。先程も申しましたが、この船も生き証人です。私たちがこの映画も一つの生き証人となる資格があると思つているんです。これを製作しました四十年前、多くの人に見てもらいましたが、その後もう一つ上映し続けているわけなんです。そうした運動の中で、私達の映画が役に立ったということ、私は誇りに思っております。私は今日ここに来まして、船はいつも喫水線まで沈んでいますから、こんな大きな船見たことがなかったのですが、スクリーンのところ、見上げるような船先、こんながっちりした船だったのかと、これは今も生きてるんだなと感じ、考えられました。

私は今、『生きて』という仕事をやっていまして、その仕事の最中でして、これからファーストシーンを見て失礼しますが、どうかみなさんご鑑賞下さい。今日は本当にありがとうございます。今日(これは、三月七日に行われた△沈めてよいか第五福竜丸)投書から三十年『第五福竜丸』上映会・船体がスクリーンVでの新藤兼人監督の講演をテープから起こし、まとめた

第五福竜丸はいまも生きて いるんだなと感じ、考えられた

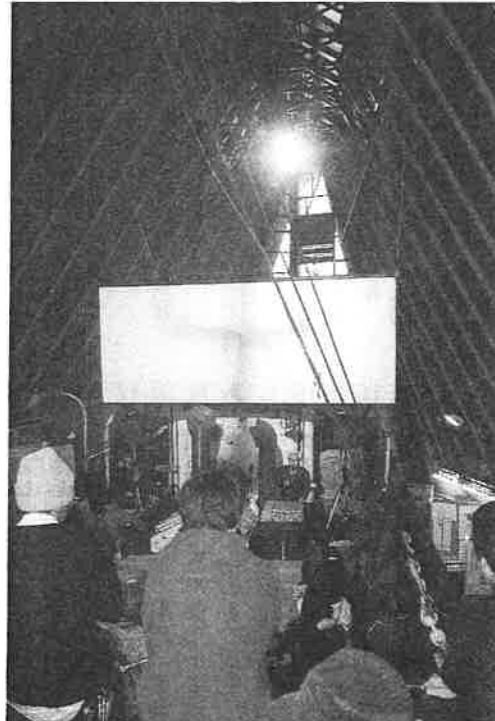
映画監督 新藤 兼人

私は広島出身で、一九五二年に『原爆の子』を製作しました。『原爆の子』はドラマでしたが、まだ傷痕を残している広島でロケをし、ドラマにドキュメンタリーの要素を取り入れました。その後も、ドキュメンタリーとドラマというものがどういふふう融合できるか、その創作を追究したいと思つていまして、ちょうど第五福竜丸というものに出会いました。これは事実をそのままやることすなわちドラマであり、俳優が事実の通り演じるということ、ドキュメンタリーとドラマの結合から、ひとつのドラマツルギーが生まれるのではないかと考えてすすめました。

私の映画人生の一つの喜び

焼津の港に行きまして、ちょうど第五福竜丸と同じトンの船が港に入っていたんですが、焼津の人船の関係者たちも全く同じだと言ひまして、船長と機関長も雇ひまして、その船で一切の撮影を

わることが出来たわけなんです。われわれは小さなプロダクションですから、お金もあまりないのにこんな大きな撮影にとつくと、非常に苦しい思いをしました。この作品を作った喜びもありました。その時作つておいて良かったなという感じがしています。今、世界の核の問題が政治の中心ですが、核をどうあつかうか、どういふふう核とつくとつていくかが、これからの人類の問題だといわれています。『第五福竜丸』という記録を作つたという喜びが、私の映画人生の一つの喜びだと思つています。また、



船体いっぱいにはられたスクリーンを前に講演する新藤監督 (3月7日)

第五福竜丸はいったん捨てられたんですが、拾われまして、いろいろな人の努力でこのように展示館が出来、展示されるようになりまして、いいことを行う人はやっぱり世の中にいるんだなということを感じています。この船は、死の灰を浴びた生き証人ですから、この船は生きていくべき、核の問題について表現する力がありますし、核の問題について、いろいろ問題を反省させたりする資格をもっている船だと思つて、大事にしなければいけないと思ひます。私は今日ここ船上で、私が作っ

この映画を、これからは私たちが大事にしまして、出来るかぎり長く、長くこの映画を保存していくというのを、やりたいと思つています。先程も申しましたが、この船も生き証人です。私たちがこの映画も一つの生き証人となる資格があると思つているんです。これを製作しました四十年前、多くの人に見てもらいましたが、その後もう一つ上映し続けているわけなんです。そうした運動の中で、私達の映画が役に立ったということ、私は誇りに思っております。私は今日ここに来まして、船はいつも喫水線まで沈んでいますから、こんな大きな船見たことがなかったのですが、スクリーンのところ、見上げるような船先、こんながっちりした船だったのかと、これは今も生きてるんだなと感じ、考えられました。